岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

身体虚弱児の健康づくりに関する保健学的研究 - 特に気管支喘息児の運動処方ノーム作成について -

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2008-03-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 三井, 淳蔵
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/275

はしがき

近頃、私達は思いもかけない病気に振り回されています。狂牛病や 0－157 などです。殊に平成 8 年の夏は腸管出血性大腸菌 0－157 に日本国中が振り回されたようです。その病原菌の発見の遅れと感染経路の確定が不明のまま、多数の死者と患者の発生が、毎日のように新聞や TV で報道された。還暦を過ぎた私も全く初耳の感染症でした。

此れ迄も幾多の感染症の渡来で、国中が右往左往したことでしょう。しかし、気管支喘息は慢性疾患であり、急激に大勢のに人々に感染し、重大な結果を招く事も少なく、そのために今日の様な変化の激しい時代では、つい見過ごされて居るように思われます。

人々は大昔から気管支喘息に苦しめられてきました。古代中国の最古の医書「素問」、「霊枢」や、BC400 年頃のギリシャの医聖ヒポクラテスの本にも記載されていると言います。またわが国では、平安時代の源　順の「和名類聚鈔」に“アヘキ”と言う言葉が、また室町時代の「節用集」には“あへく”と言う言葉が見られます。今日においても気管支喘息で喘いでいる人は多く、現代の医学でもその完全な治療法は確立されていません。

それにも拘らず、喘息発作の苦しみは一時のもので、喘息の治療より学業を優先させる傾向があるように思われます。発作が治まれば、学校へ登校させるのならまだしも、学校は休んでも学習塾やお稽古には、叱咤激励して通わせることが当たり前のようです。

0－157 のような恐ろしさが無いため、つい見過ごし、子供の健康を損ねているような気がします。　多くの気管支喘息を患っている子供は、既に 2～3 歳頃に発症しているようです。私達が、1991 年に岐阜市内の小学校 2658 名の児童を対象に調査した結果、その約 4.07%の子供が喘息発作の症状が有ることが分かりました。

気管支喘息は慢性の病気で、気長に根気よく治療と健康づくりに取り組まなければならない病気であると思います。特に精神的にも肉体的にも大切な発育期にある子供たちの健康づくりを疎かにしては、体格・体力的な発育・発達だけではなく、子供時代に培われるべき、生活習慣や人格形成など様々な面への影響を見逃すことはできません。

私達は、此れ迄も喘息児水泳教室や喘息児のための健康教室を開催してきました。これらの結果、喘息児の体力は向上し、生活への取り組みも積極的になったように思われました。そして、かなりの強度の運動負荷を加えることがで

きました。しかし、病気としての喘息には負の要因となる場合もあり、また逆に激しい運動に耐えることが積極性と頑張ることの楽しさとを体験させることも出来ました。

そこで、今日子供たちにも人気のあるサッカーを取り入れ、楽しみながら体力づくりを図り、何処までが運動負荷量として適切であるかを試みました。

今回の喘息児サッカー教室を実施するに当たり、いろいろ研究の御指導を頂きました岐阜大学医学部薬理学教室丹羽雅之博士、岐阜県郡上中央病院小児科部長篠田紳司博士に厚く御礼申し上げます。

平成９年３月

三　井　淳　藏